

氏名	池田 武史
ヨミガナ	イケダ タケシ
学位の種類	博士（映像メディア学）
学位記番号	博映第16号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 退屈の音楽、その制作と鑑賞の実践 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	桂 英史
(論文第1副査)			()	
(作品第1副査)			()	
(副査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	桐山 孝司
(副査)	東京藝術大学	教授	(映像研究科)	長 嵩 寛幸
(副査)	京都造形芸術大学	教授	(芸術研究科)	藤本 由紀夫
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	
(副査)			()	

(論文内容の要旨)

本論は、2010年くらいから始まった私の作品を統べる「退屈」というキーワードをもとに、以上のような分類すれば、自作を中心に音楽の制作/鑑賞者の実践者である筆者のもとに検討された、思考の集積である。その集大成的な作品として、2016年にオランダのライクス・アカデミーで制作されたTzodom. 24という、360°カメラで撮影された24時間のループの作品、及びその解説編として提示されるルイス・ブニュエルの『皆殺しの天使』(1962)の日本語吹替改変版を審査作品として提示する。これらは、『皆殺しの天使』の日本語吹替改変版で語られる内容含めて、音楽ないしパフォーマンスアートの領域における受容や制作の方法論としても読み替えることができるだろう。

私の制作活動は、大分類すれば、ハードコアパンクと2000年代の日本の即興演奏～実験音楽の影響下にあるが、それらの受容形態にとって支配的な旧来の受容の指向性、すなわちこれらの音楽が用意する音について「没入」せねばならないという態度への反発が動機となっている。これら2つの音楽は、馴染みのない鑑賞者にとっては単調で変化に乏しいものであり、ときに「退屈」でありさえすることは否めない。付言すれば、本論の中で明かされるように「退屈」がその作者によって意図的であり、換言すれば鑑賞者が作者の提示する諸々の要素以外を、演奏される時間の中で意識させる余剰を残すということである。この「退屈」に意識的な音楽は、近年の観客参加型の芸術形式とは別の意味で、企画者と鑑賞者の双方に能動性を用意する時間芸術である。

これらの当面の課題は、多くの鑑賞者側にある程度の能動性を期待する作品がそうであるように、作者の意図を語っただけでは、その作品についてほとんど理解したことにも記録したことにもならない点である。故に私の作品は、旧来の作者（発信者）↔鑑賞者（受容者）というような制作/鑑賞のモデルを前提としていない。このようなコンサートのモデルではなく、作者はあくまで企画者兼参加者であり、鑑賞者/観客も参加者であるようなパーティに近いモデルで制作/鑑賞、記録も行われる。

私の制作の最終的な目的は、この「退屈」という途方もない課題について、これから没入によって逃れる

のではなく肯定的に個々の生の中で扱うことを制作と鑑賞の実践の中で示すことである。

この論文が書かれている2018-19年現在でも、何かに「没入」したい、せねばならないという強迫観念的な消費者への扇動を含めた同時代的な気分は気の所為どころか支配的ですからある。故に私が考える戦略的に退屈になる、退屈を肯定するという、そしてその実践である「退屈の音楽」というものは、我々の生活を反映した普遍へ届き、「没入せよ」という声からの実際的な回避の策になりえることを望む。

(総合審査結果の要旨)

本論文は主に音楽の受容において、没入と興奮を前提として習慣的な経験となっている音楽鑑賞を批判的に乗り越えてゆくための実践と理論化が学術的な動機となっている。著者自らが実践してきた音楽と映像をもちいたインターメディア活動は、大きく分類すれば、ハードコアパンクと2000年代の日本の即興演奏～実験音楽の影響下にある。博士後期課程入学以降、その実践の成果を作品として国内外の展覧会等で発表するとともに、自らの「没入と興奮」を乗り越えるべく進めてきた制作のプロセスを、主に「退屈」という観点から自己評価しつつ、「没入と興奮」を乗り越えるような音楽受容のあり方について研究を重ねてきた。最終審査に提出された研究作品と研究論文は、その成果である。

提出された研究論文において、著者はとりあえず序論において、自らが影響を受けてきた音楽を参照しながら、ジャンルやフレームを批判し、没入と興奮を前提にした鑑賞のモデルに対する徹底的な懐疑から論を進め始める。1950年以降にさまざまな分野のアーティストやミュージシャンによって発表されてきた「即興音楽」という分野における大幅な変化と拡大について触れながら、その結果同時代芸術を検証してゆく上でも、映像やパフォーマンスなど新しい表現形式がどのように受容されてきたかという点で大きな視座の転換が迫られていると提言している。

平成31年2月26日、学位論文審査委員会の主催による最終試験において、審査委員全員出席のもと、研究作品上映と研究論文についての著者による口頭発表を求め、論文における参照する先行事例や学術的な背景について質疑応答を行った。

研究作品に関しては、「退屈」という中心的なテーマが表現されていないのではないのか、「吹き替え」という発話の即時性は物語にとってどんな役割を担っているのか、論文においては、「退屈に留まる」とは他者の存在を認めるという仮説に基づく表現は音楽や美術にとってどのような他者表象となっているのか、ジャンルの分類とは批評性であるとするならば、退屈を意図的に配置することはどのような意味があるのかといった質問が出され、それぞれの質問に対する著者による応答と審査員間での活発な議論が繰り広げられた。この議論の延長線上に、ライブパフォーマンスにおける退屈についての論述にいささか曖昧さで一貫性が欠けていること、世界を感知するための手段としての音楽への追究が不十分であることなどが指摘された。

とはいえ、これまで芸術史や表象文化論あるいは音楽批評に断片的でエピソードのように語られることの多かった即興をめぐる文化的な事象を退屈というユニークな観点から総体的に捉え直し、少なからず独創性の高い表現形態を見出し、自らの作品に先進性をもたらすことに成功している。その一貫した制作態度と自作解説の論旨は博士の学位授与に十分値することを審査委員全員が高く評価し合格と判定した。

以上のように、著者は博士(映像メディア学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。